





蛇さん

そして
まだそこに



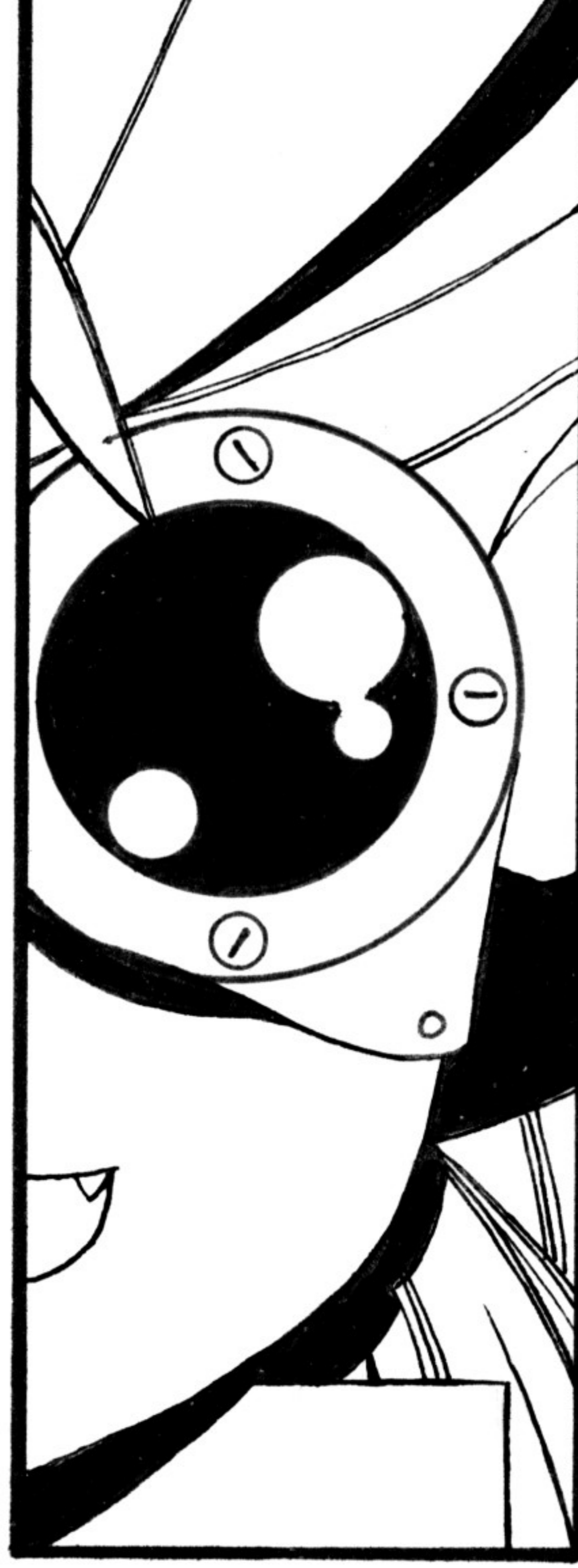
まだそこに
いますか？

いるのですか



こんにちは

「いつもながら痛々しいお姿で。」
「蛇さんもいつもその格好だね。」
「私はいんです。私は完全に自分と世界が嫌いですから。すべて封じて何も不都合はありません。むしろこれこそが気持ちいいんですから。」
「問題は、あなたです。」
「普段から自分が嫌いなそぶりは見せますけれど世界を嫌いきっていない。」
「.....」



「世界はまだ全て見えない。見えるはずも無い。自分で世界全てを見るなんて実質不可能なんですから。知っている範囲見ている範囲で世界への判定を下さなければならぬんです。」
「うん...僕は何も見ていないね。」
「そのご自分の翼が好きなんですよ?」
「そうしてその翼で外へ出たいと思っていらいっしやる。その動かない螺子止めの翼で。」
「動かないってなぜ分かるの?」
「ならば動くのですか?」
「.....」



私は嫌いました
では...
あなたは?

好きなのですか?



嫌いなのですか?

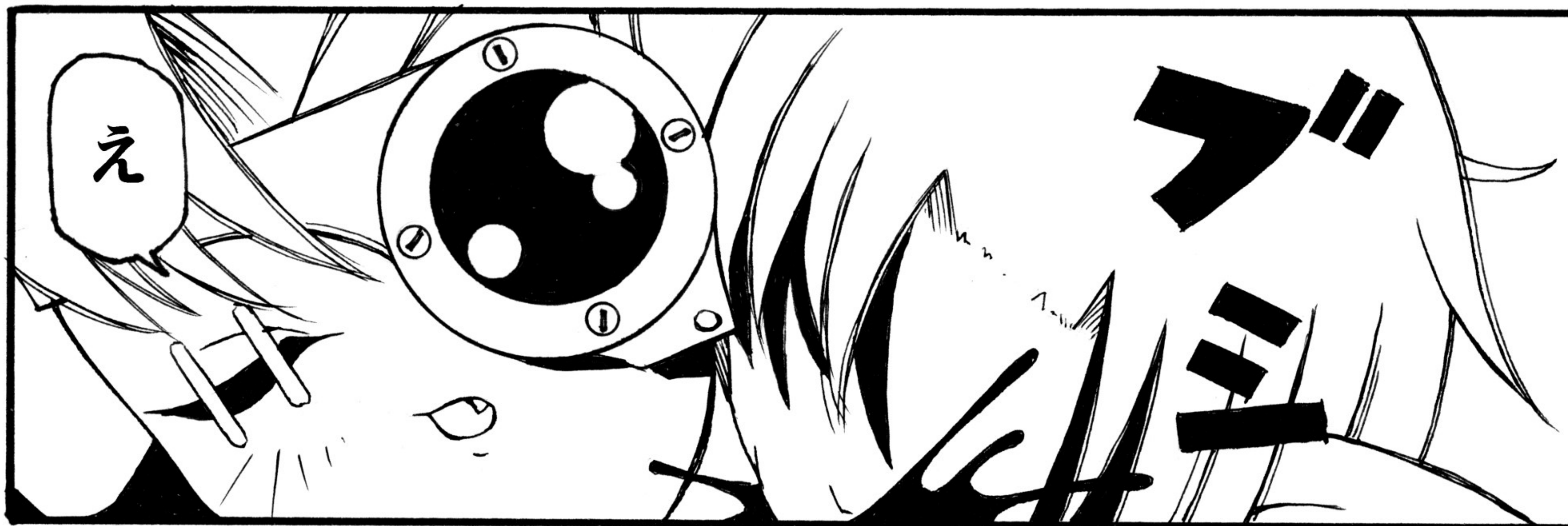


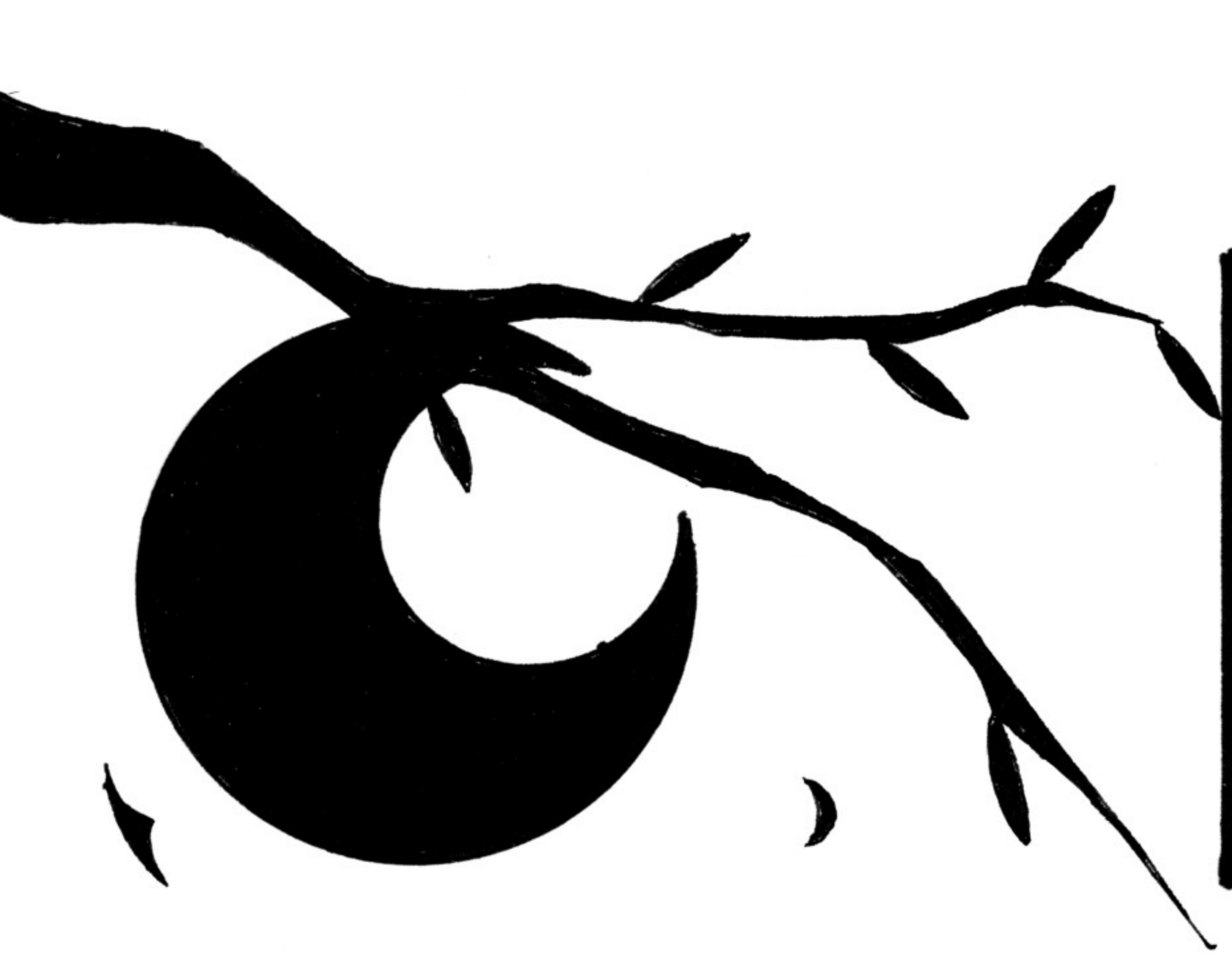
でも

飛びたいよ…



まだ、そこにいるのか





綺麗な翼だ



そうだろうか？

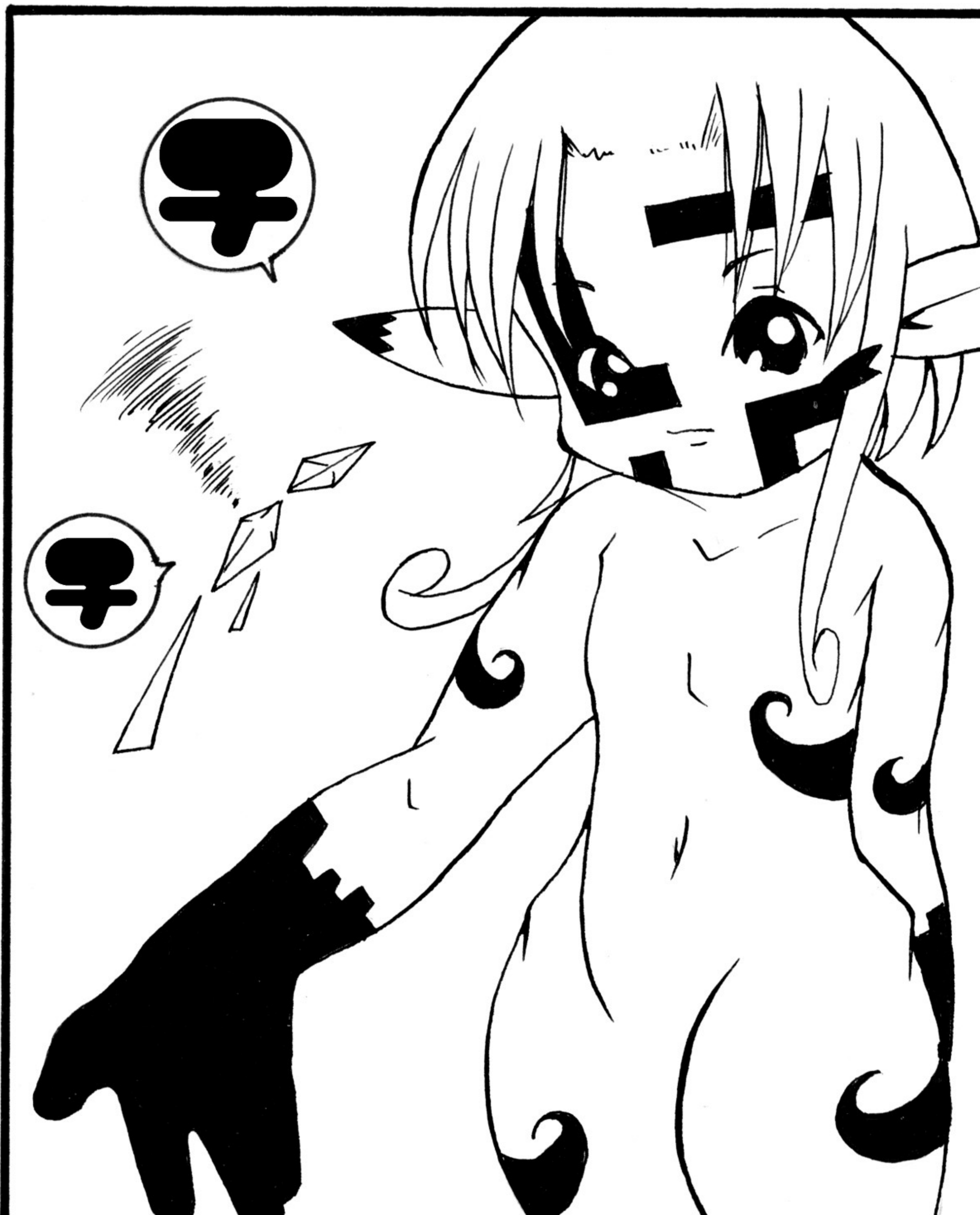
ぼく



でも

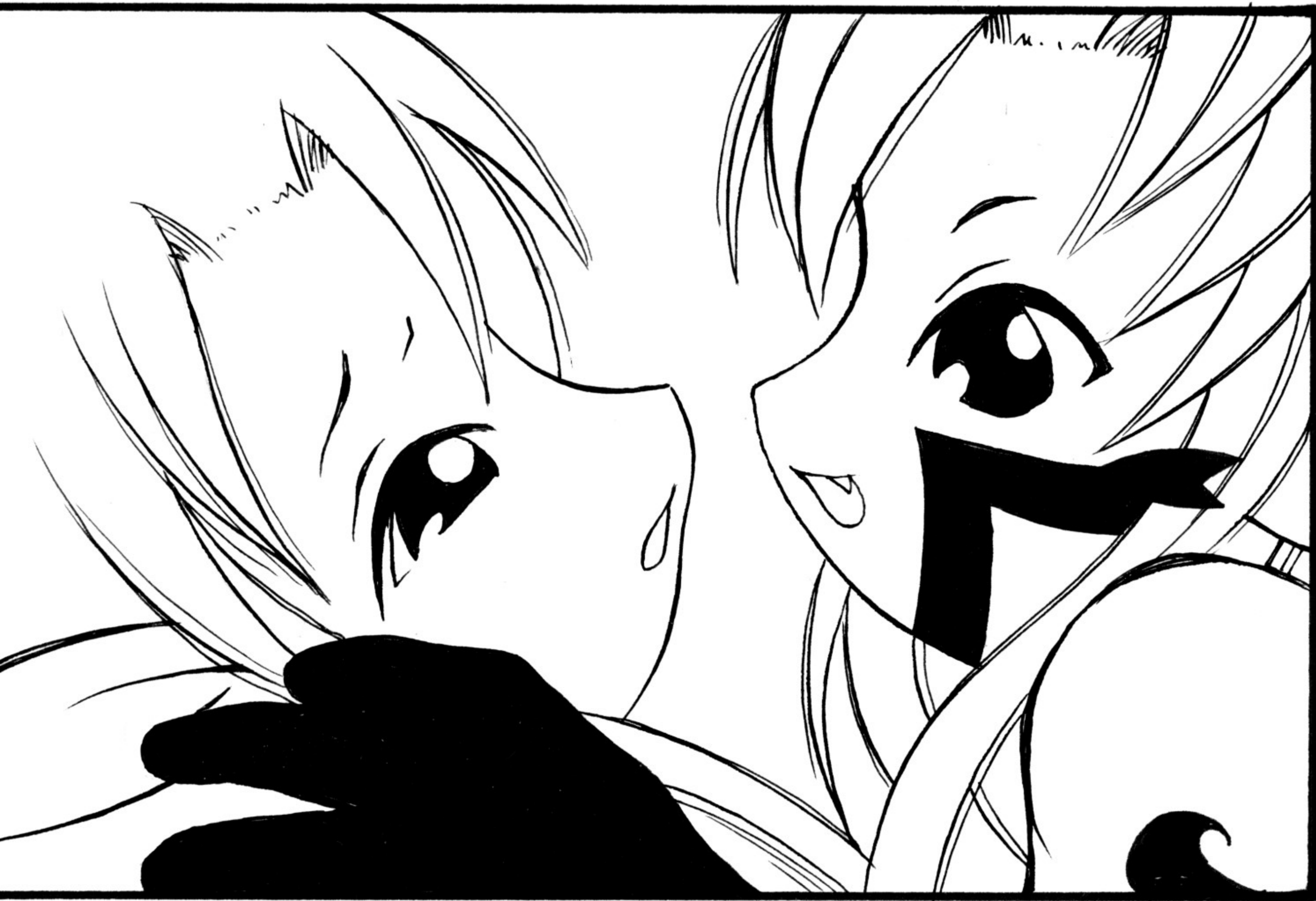
その翼じゃ
飛べないよ

誰？

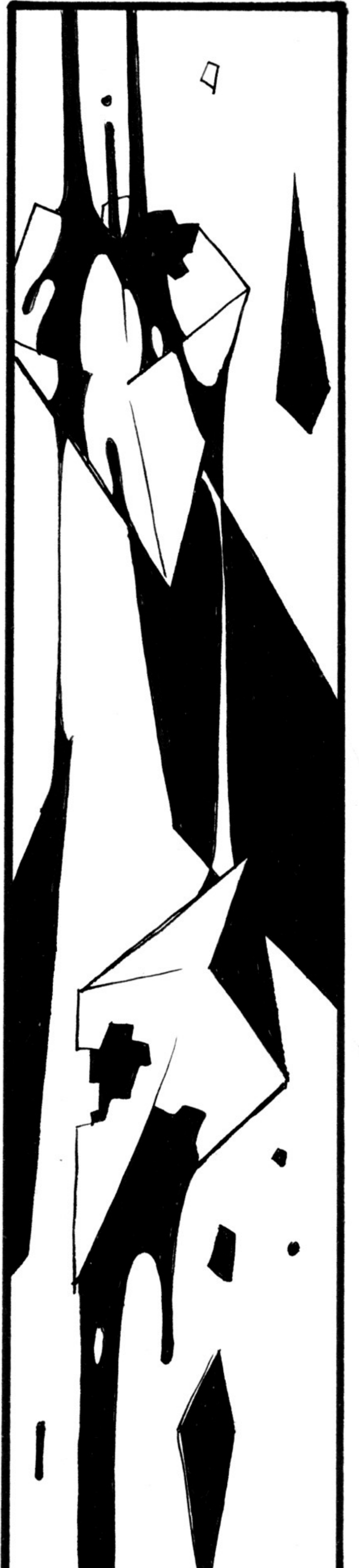




これじゃ



駄目だよ



「閉じちゃってる。世界が嫌いなのか、自分が嫌いなのか。」

「それすらも決められないまま。」

「何も見ないし、何も考えない。」

「だからこんなガラクタのような鳥だか虫だかも分からないものしか折りたためない。」

「でも、そんなの決められないよ。」

「いや、決められるはず。」

「だって分からないのなら、

分からないっていうことが

分かっているのだもの。」

「…そんなの。」

「分かっているのに、閉じたままで。」

「その閉じ込められた心は、どこへ行くの？」

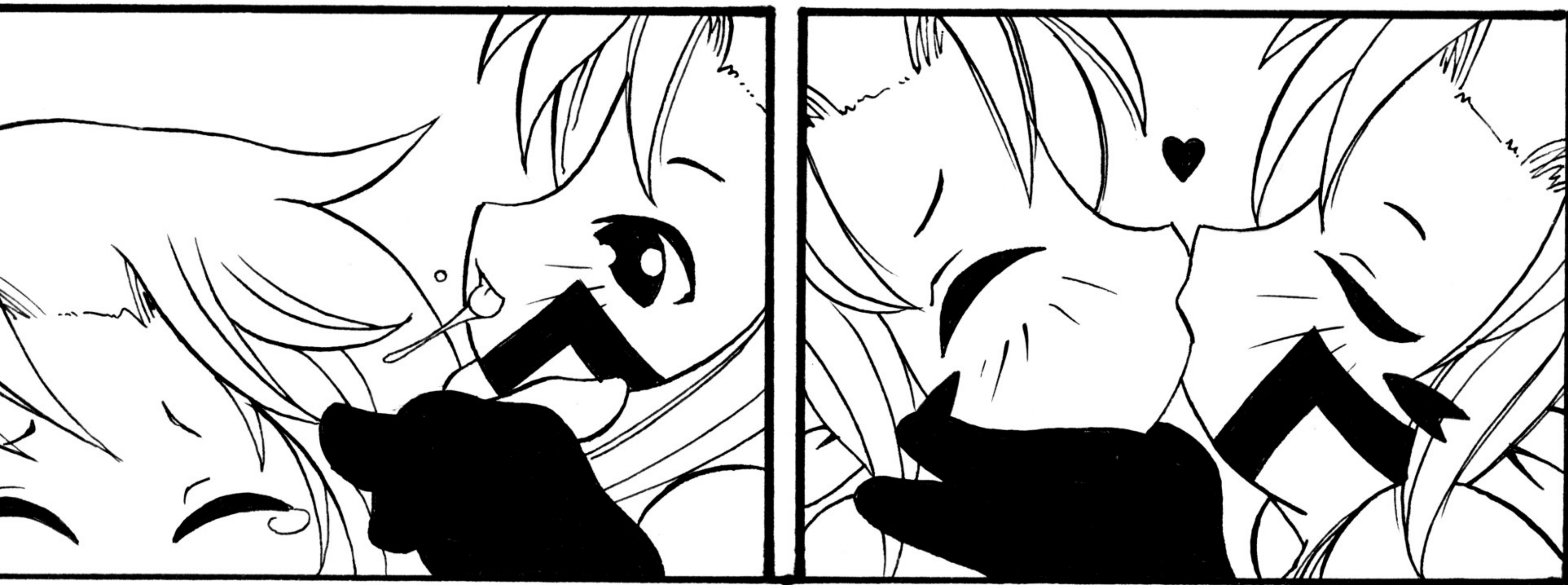
「閉じられた身体に閉じ込められて

どこまでも、どこまでも濃くなった心は。」

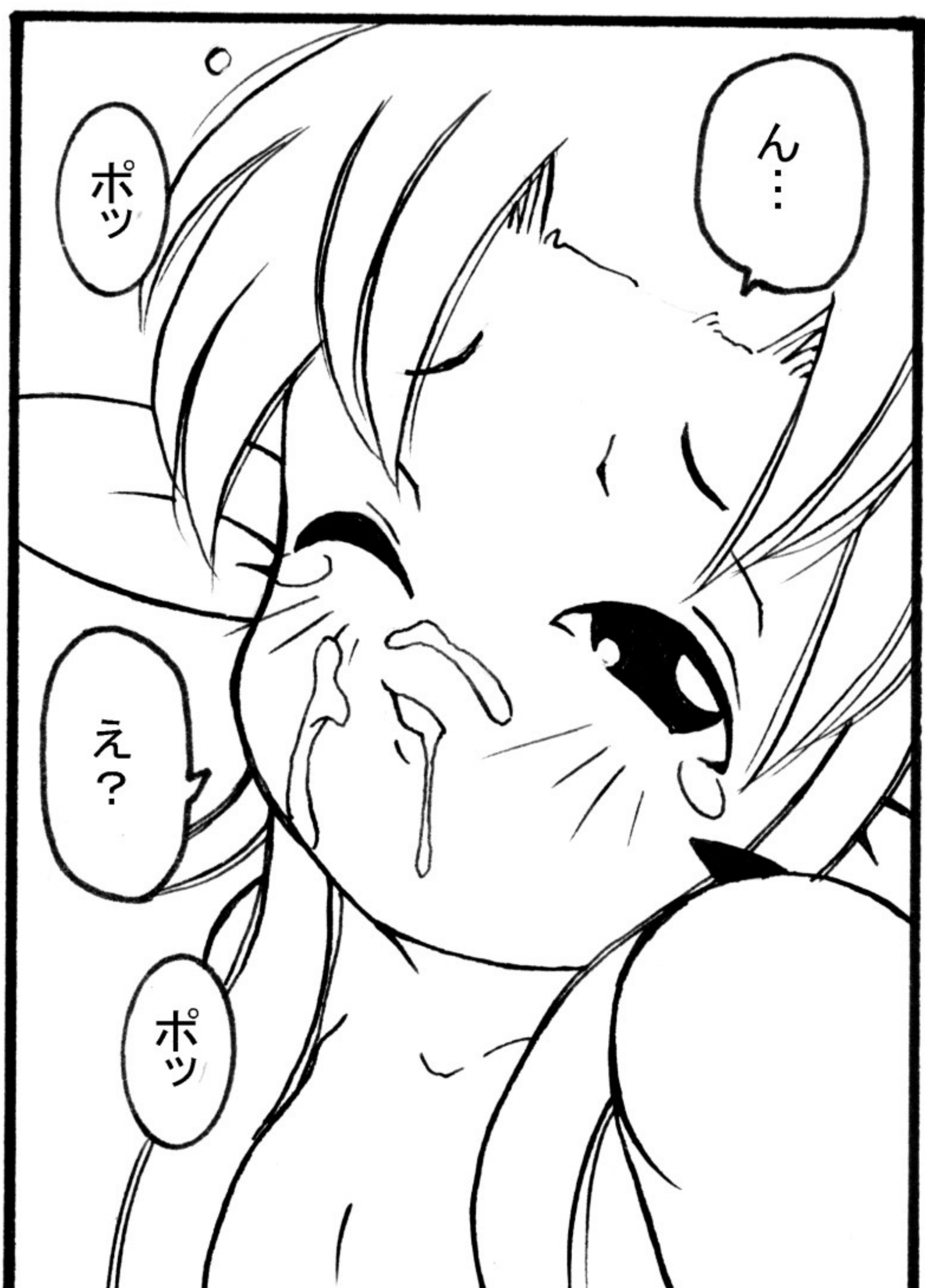
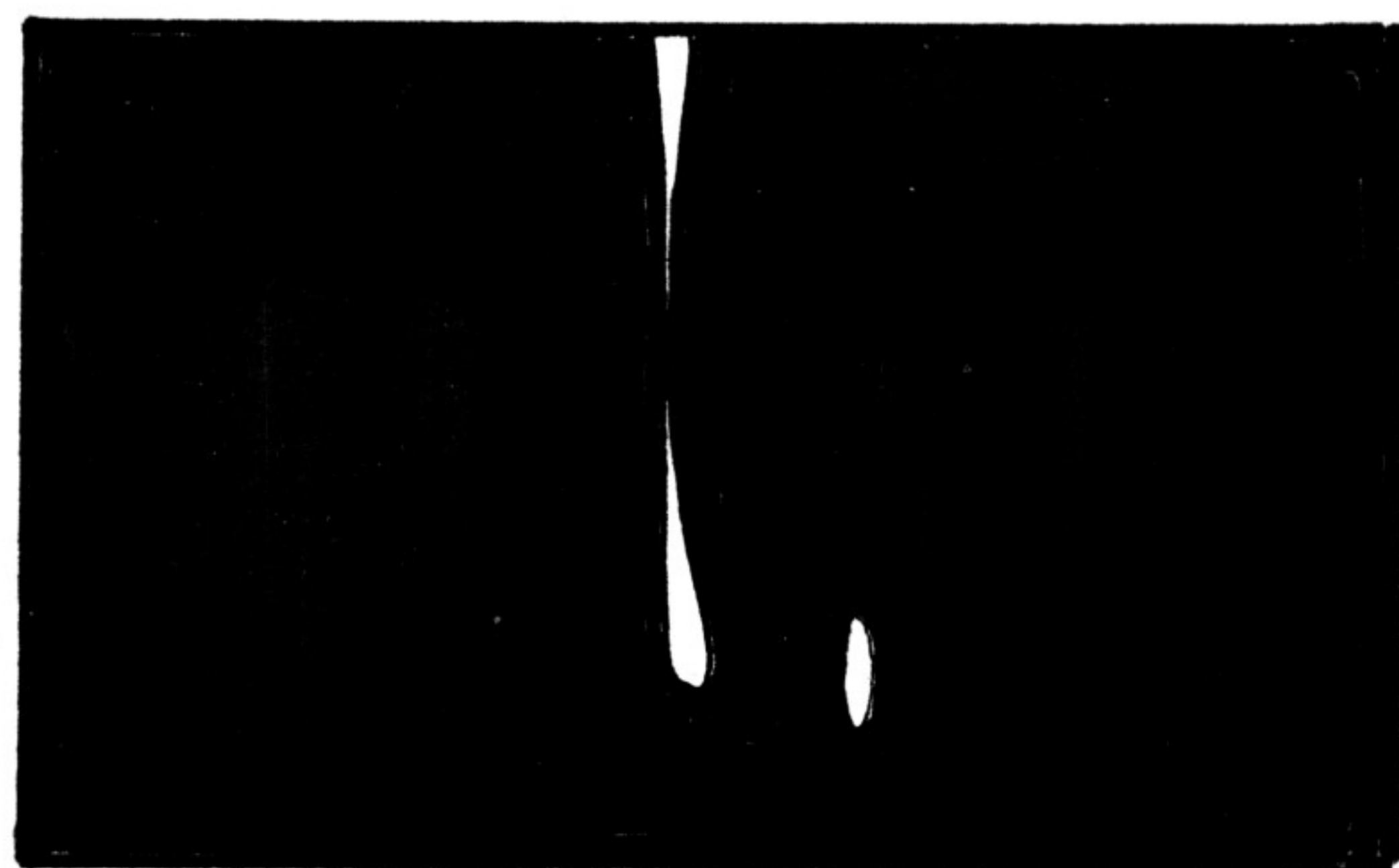
だから、僕が来る。



ぼくらの翼は



空を飛ぶための器官ではないよ







翼は僕らを縛り付け



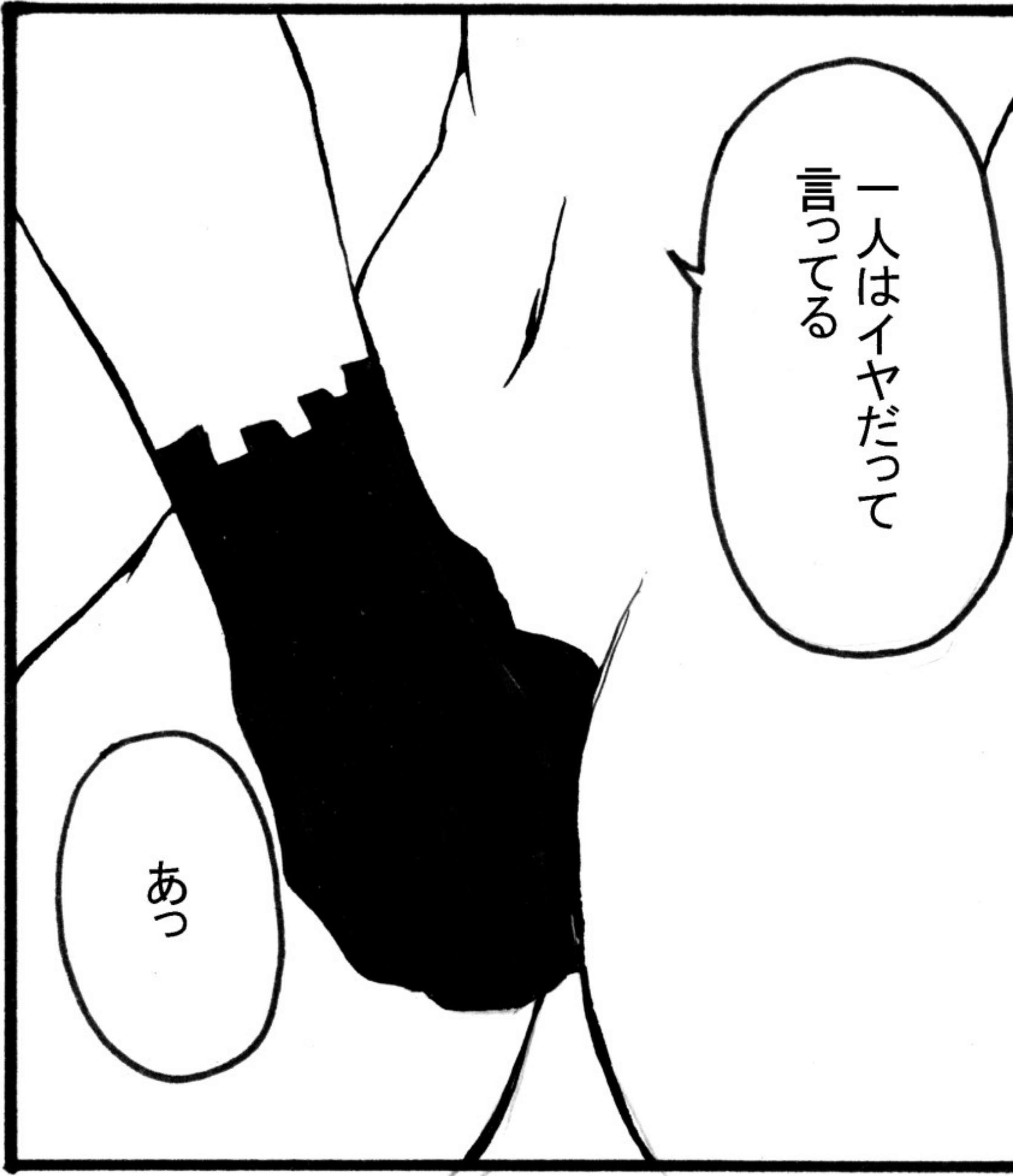
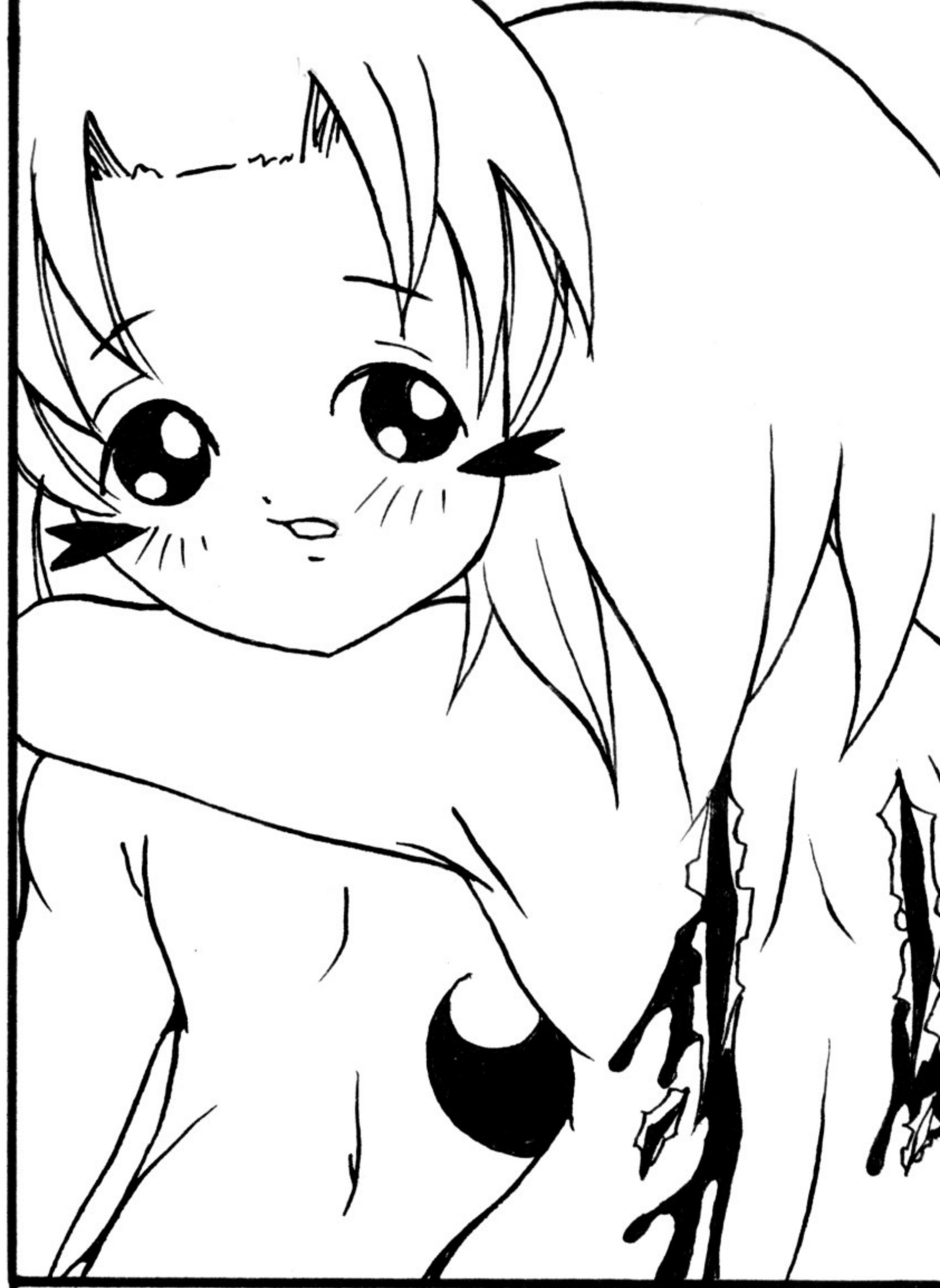
固定するための器官





このあたりの木から
いつも匂うよ

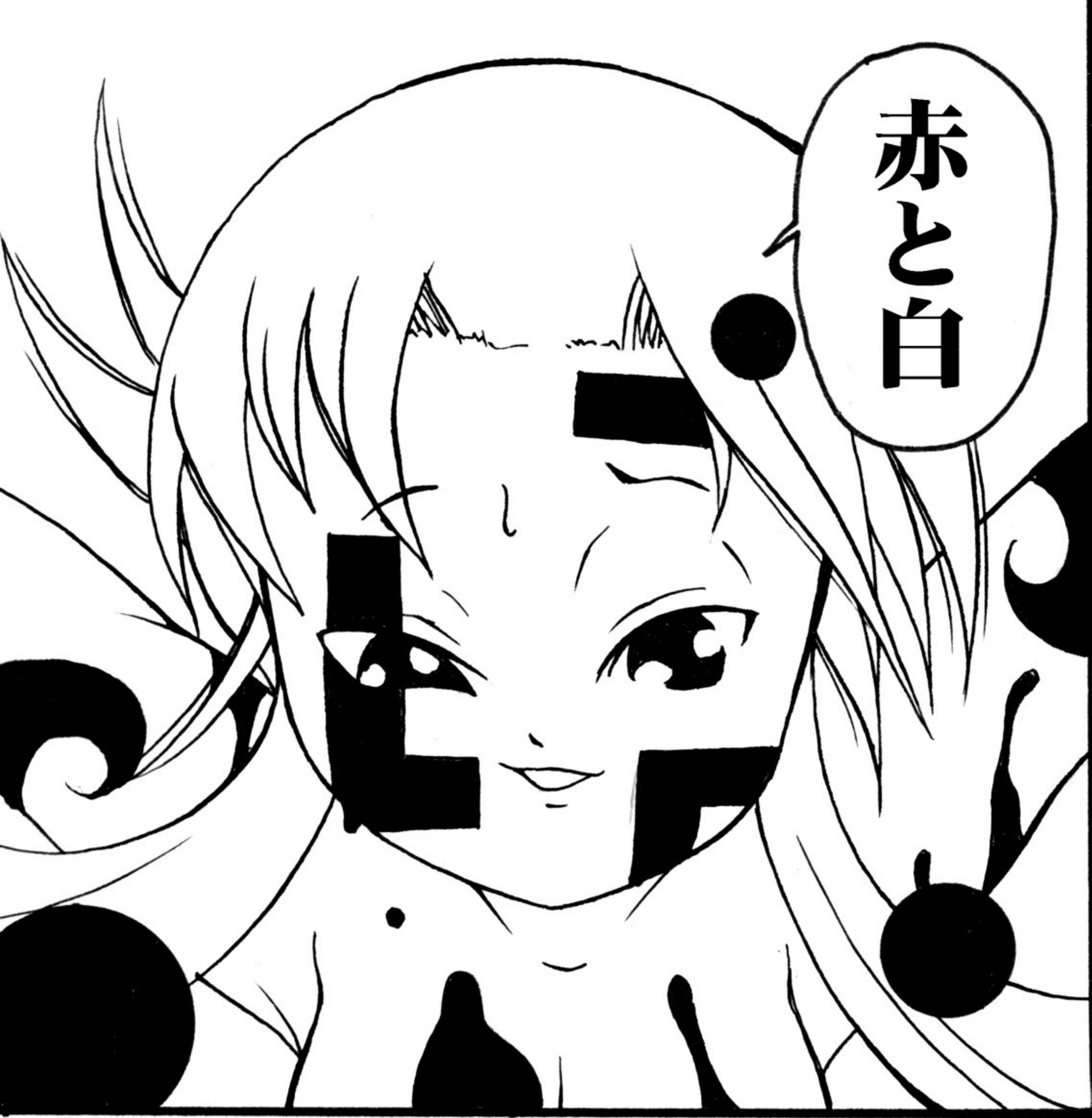
ここは何回
こぼしたの?



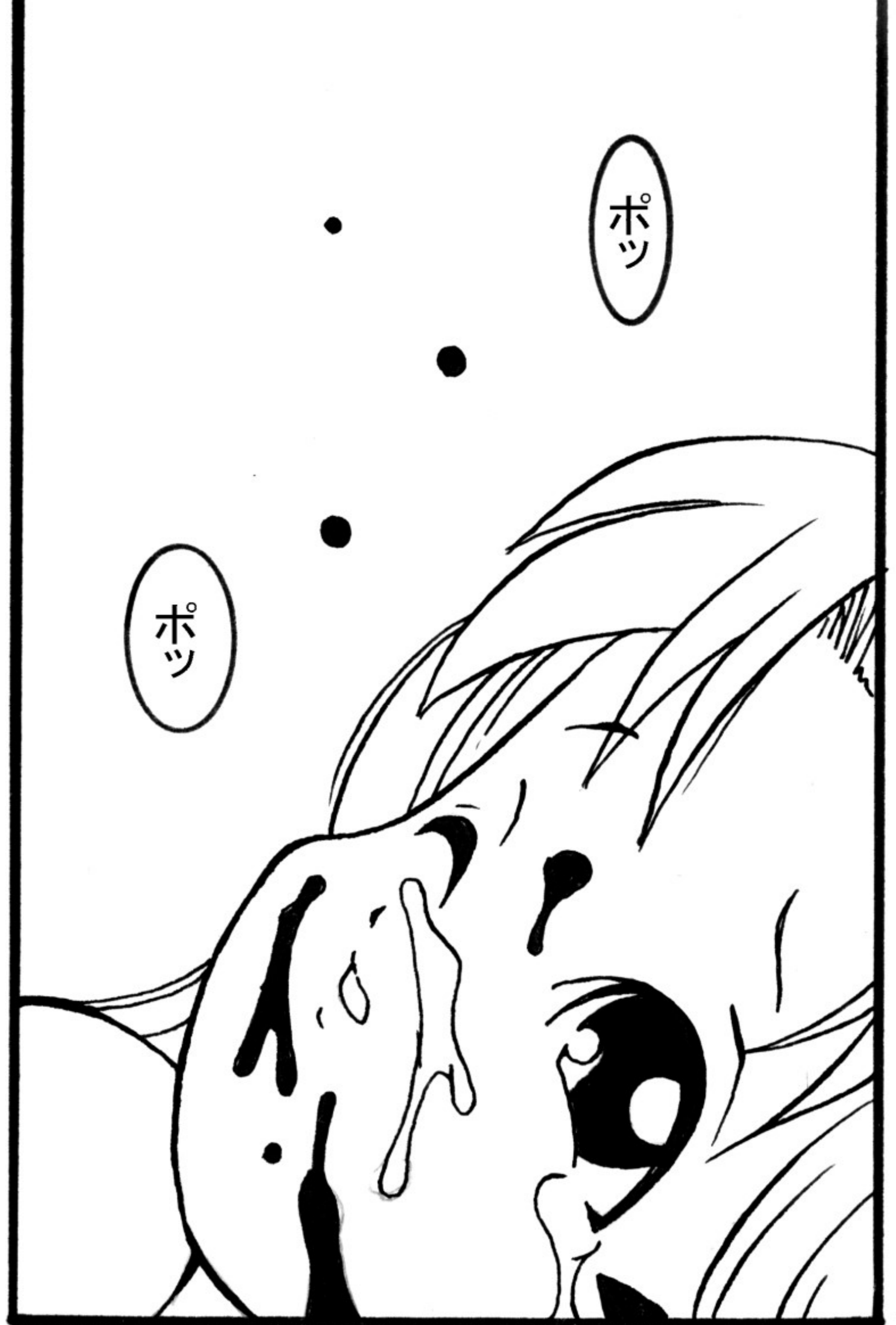
一人はイヤだって
言ってる

あっ





赤と白



ポッ

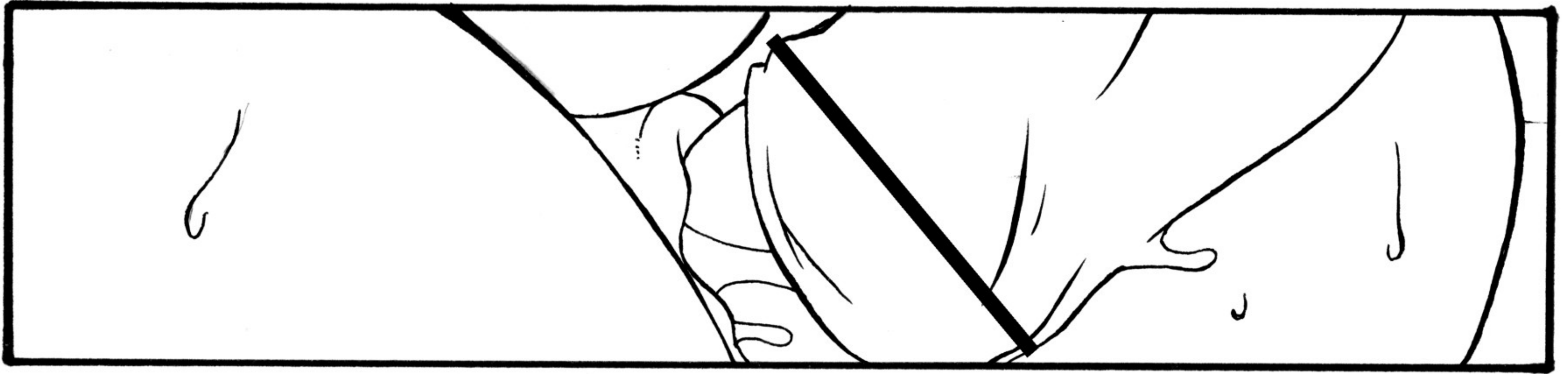
ポッ



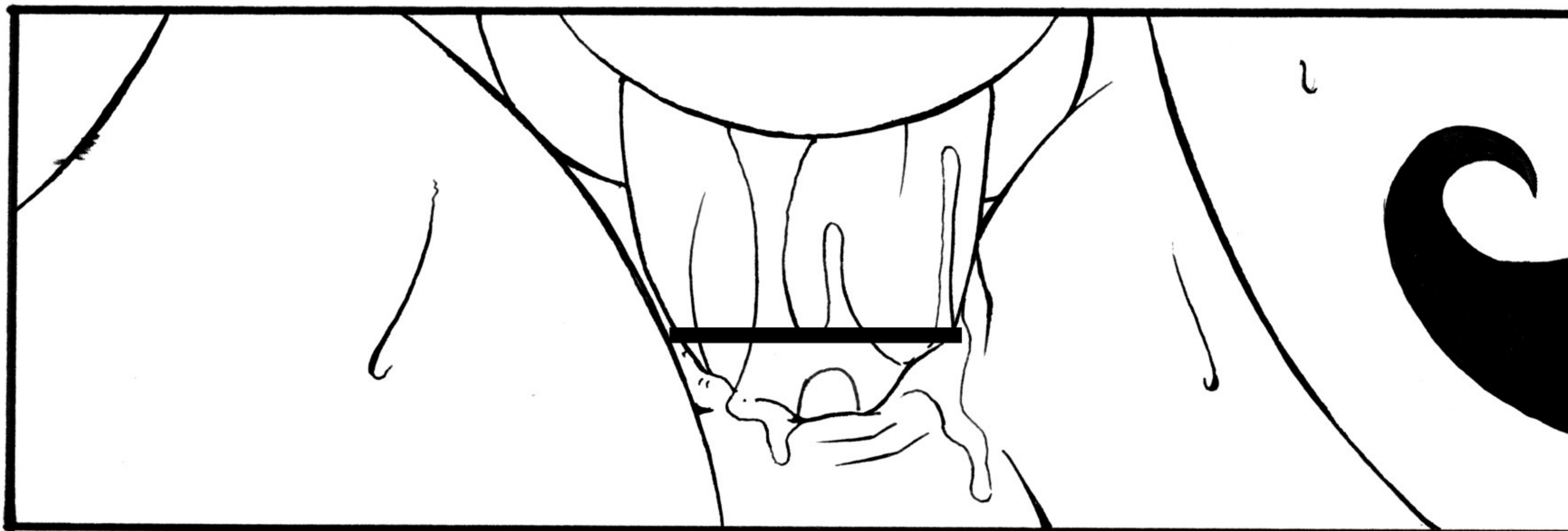
どちらも
盛大な命の無駄遣い

どちらも
盛大な心の無駄遣い

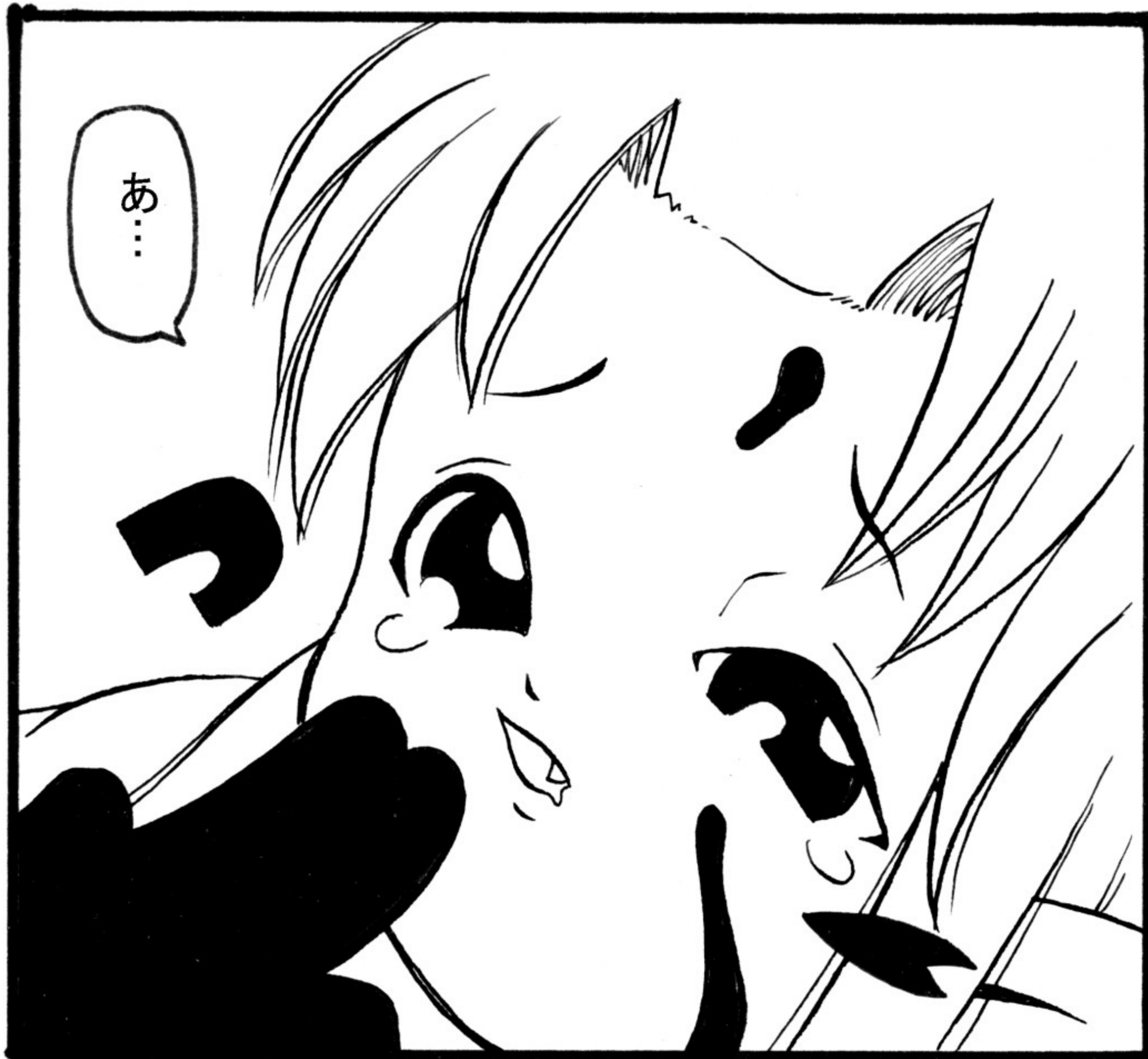
どちらも同じ



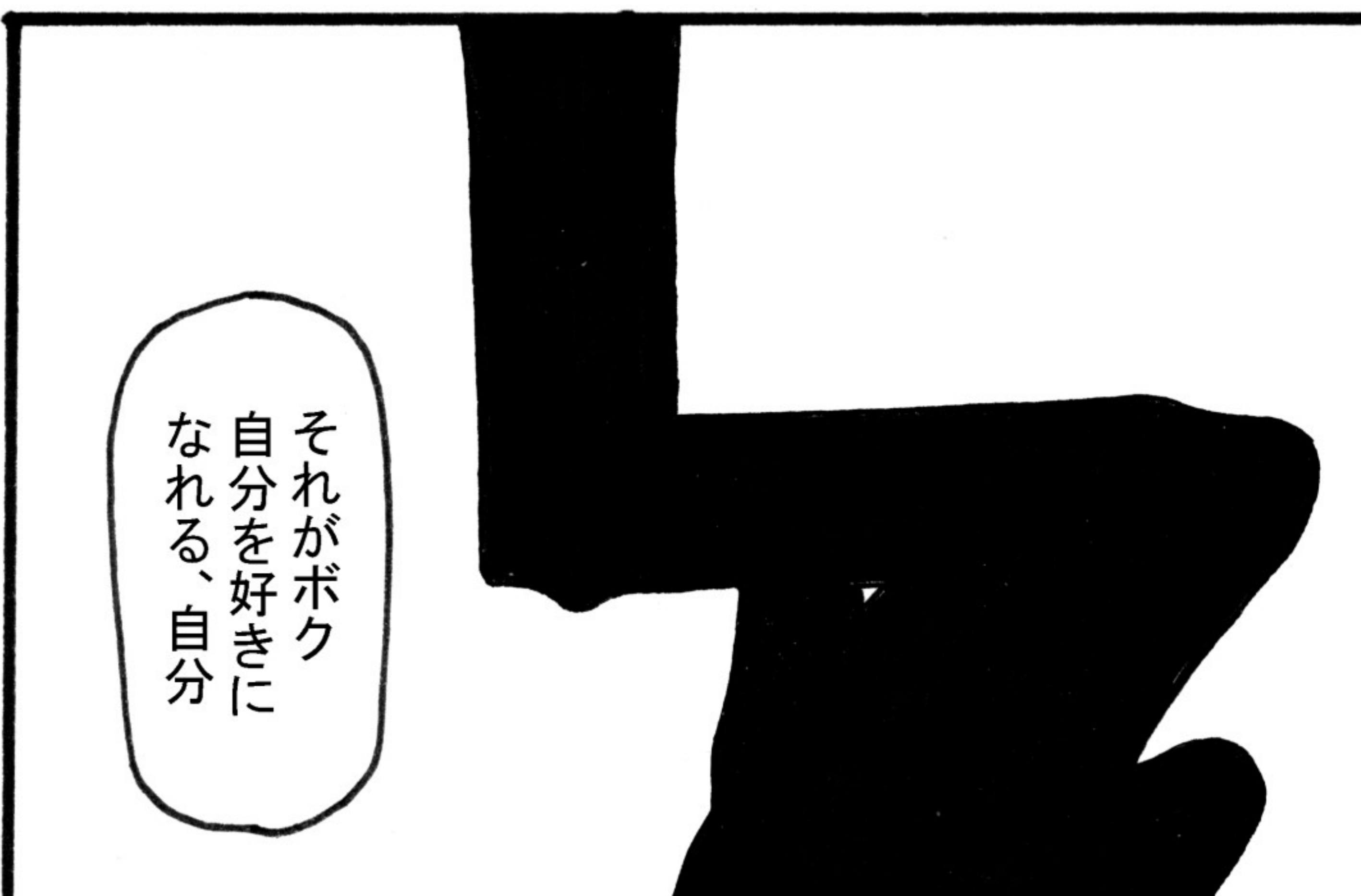
どっちが良い？

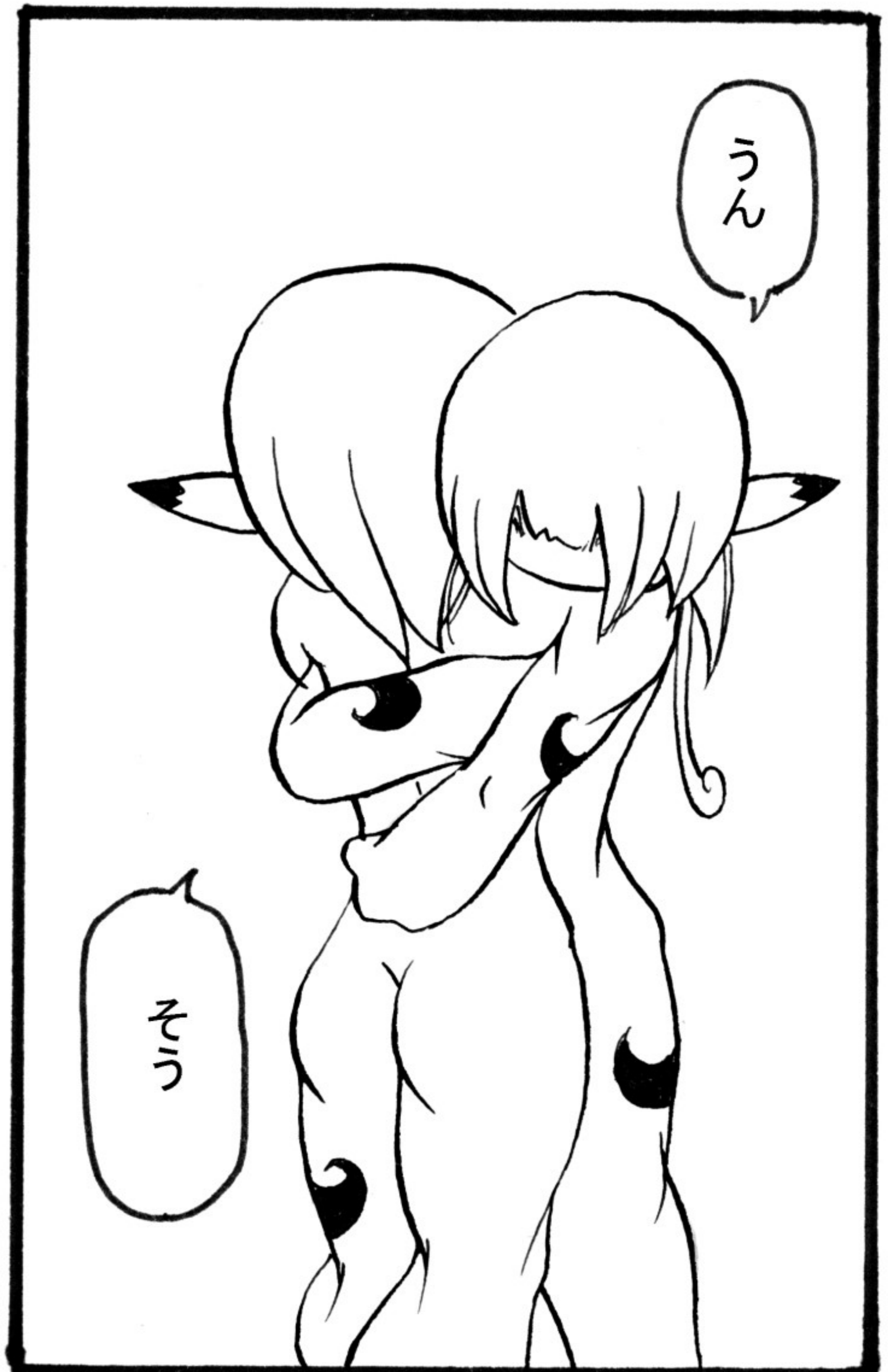
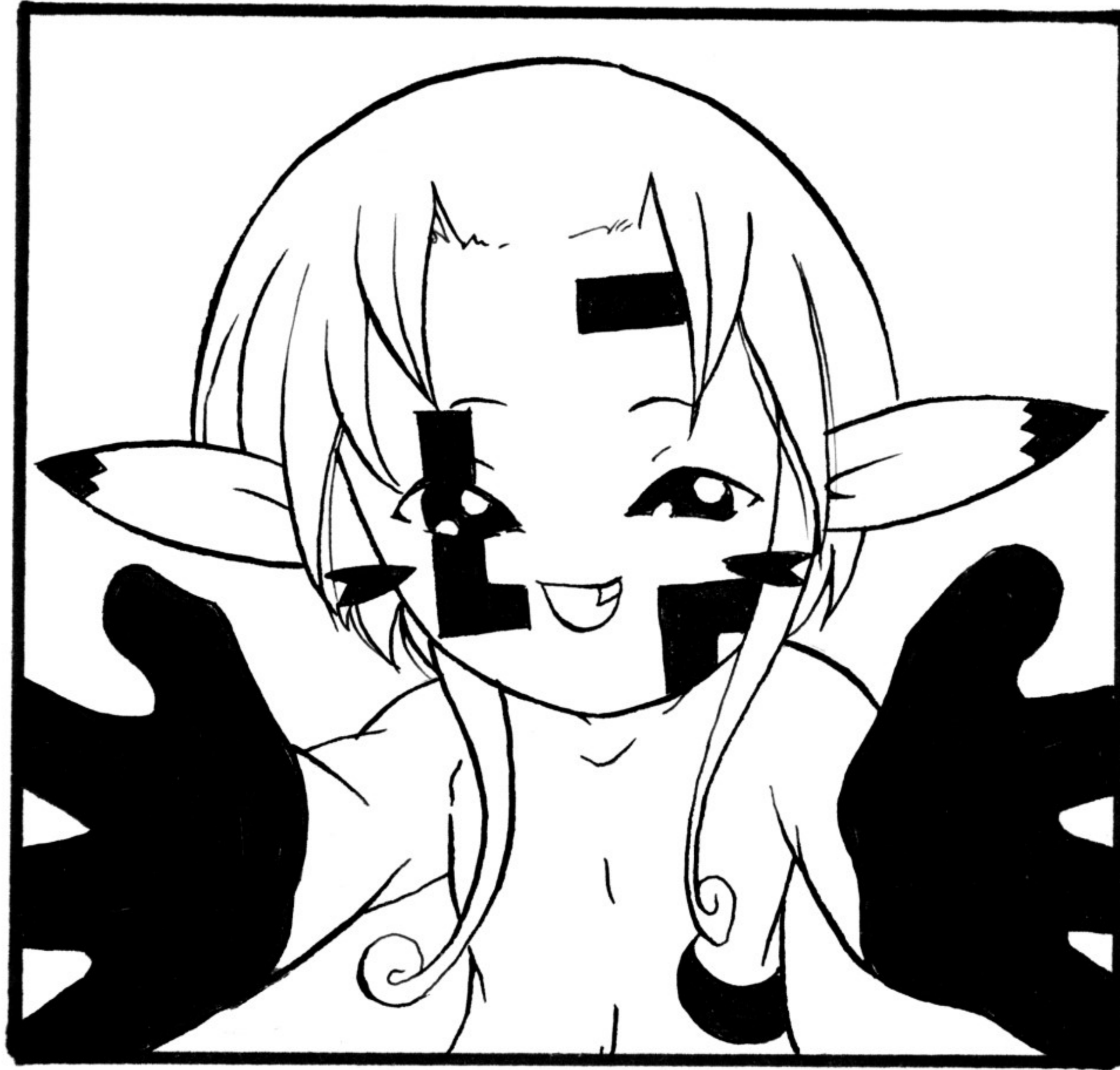
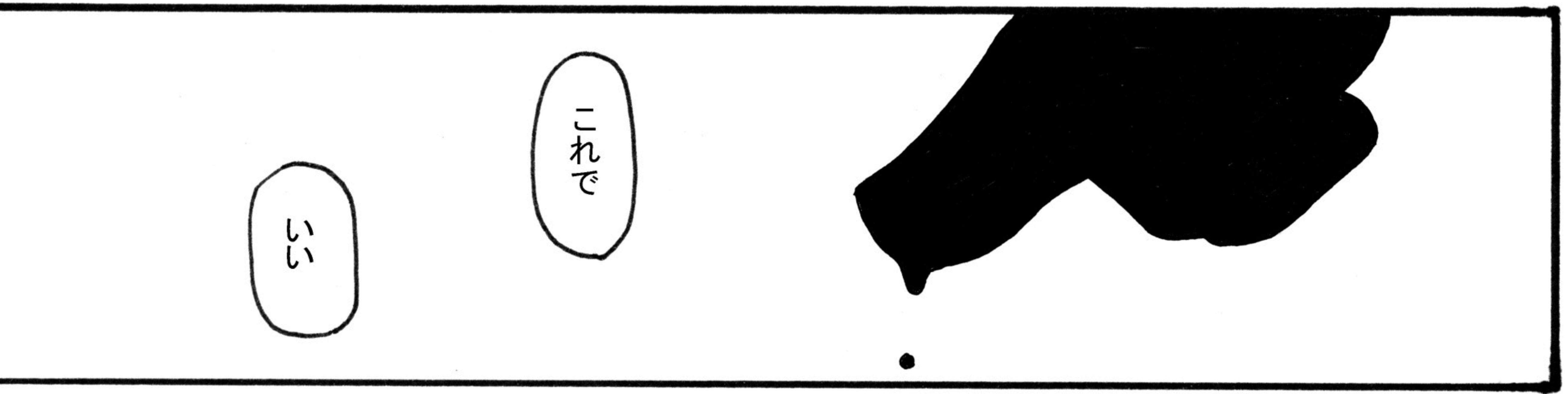






これは全ての前提



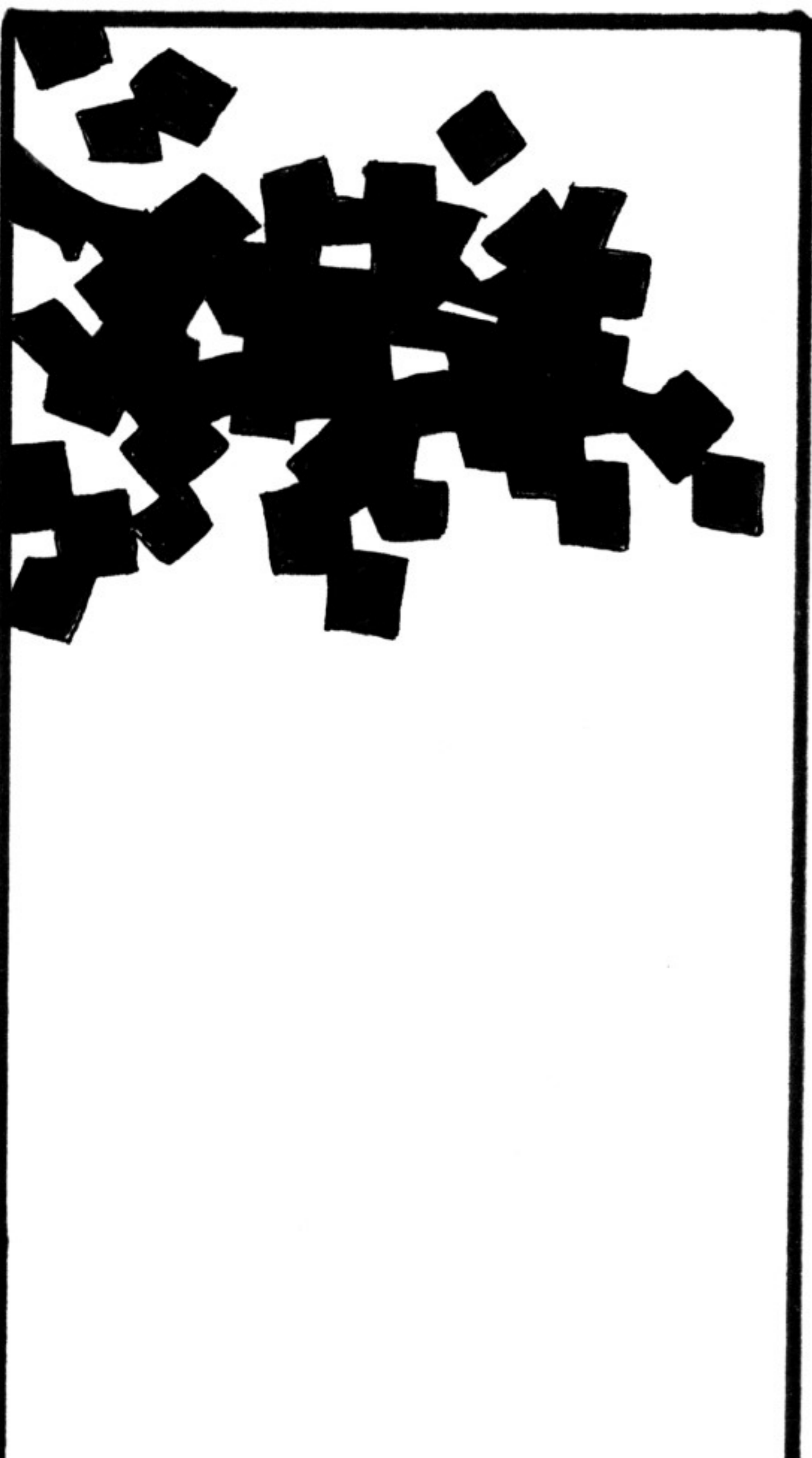
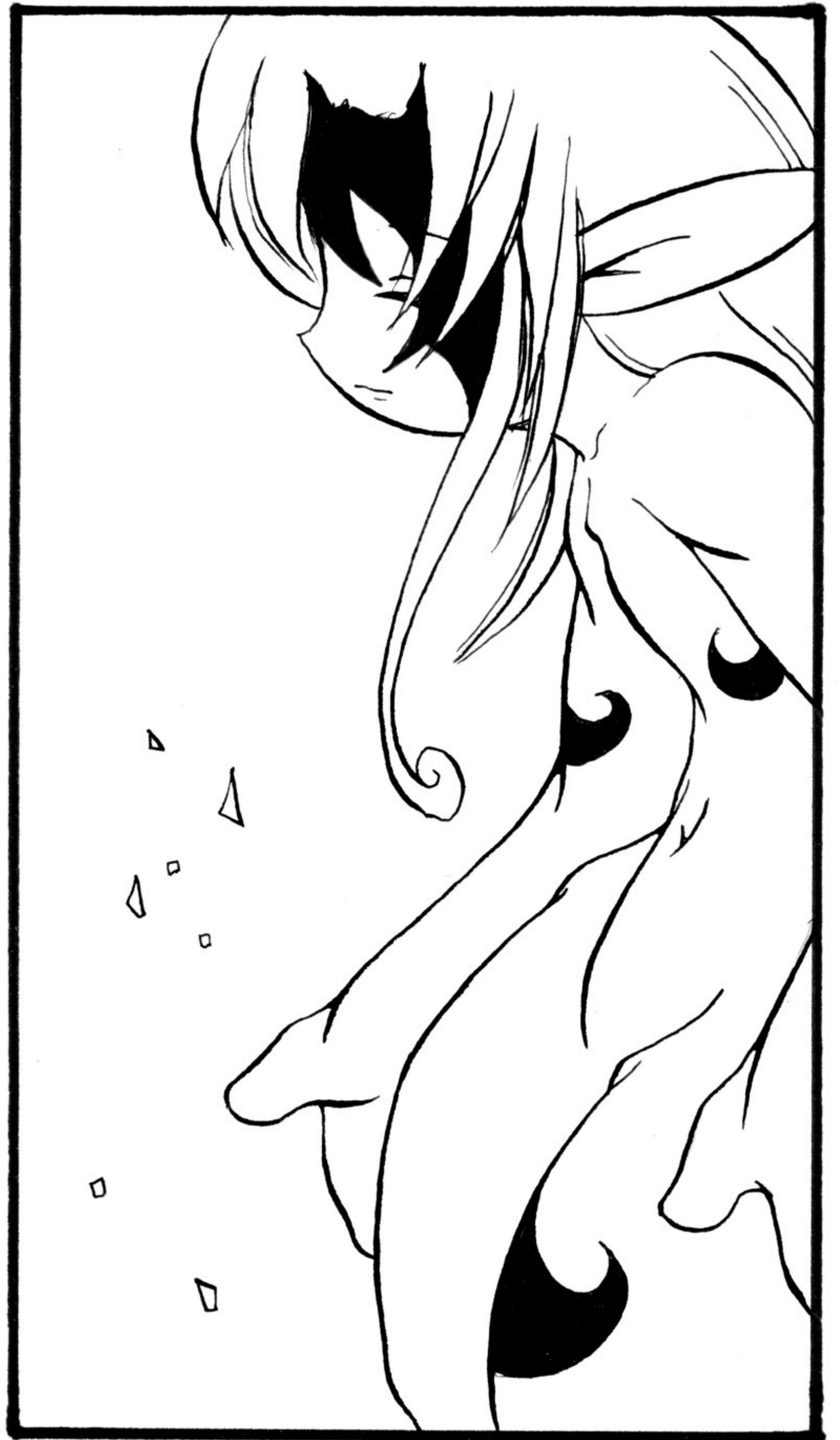


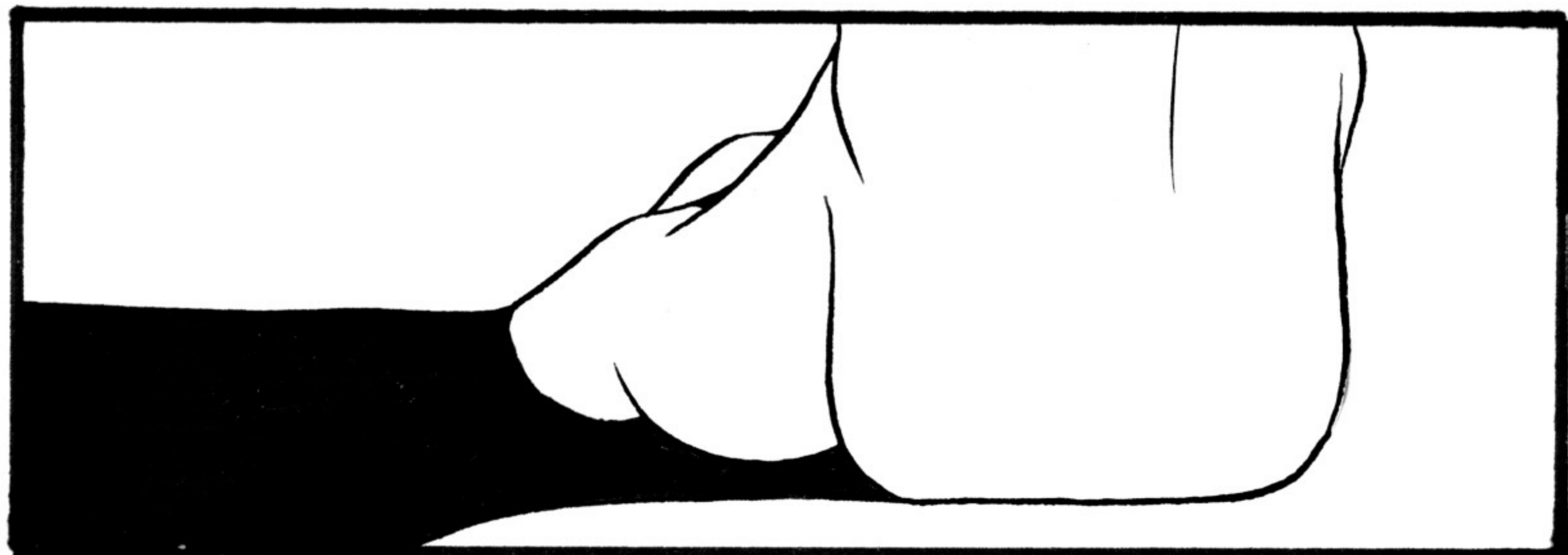
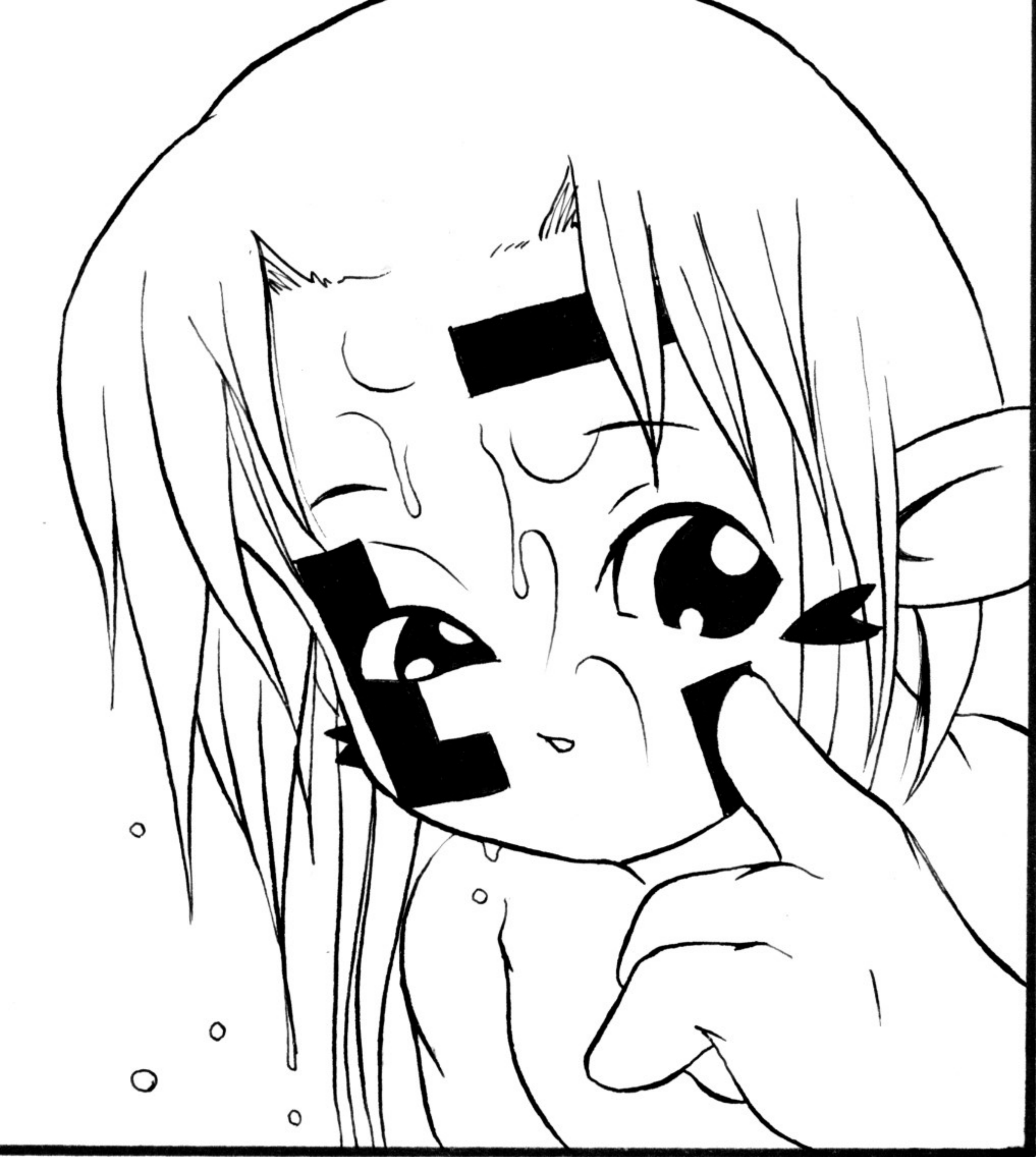
わかった？

パシッ

それじゃあね

うん。
分かったよ。





ぼくの歩いた
後に

花が咲くね



BEGIN ALL.